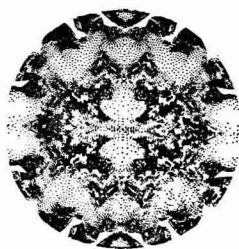


新銳作家叢書 小川国夫集 東海のほとり ほとり

河出書房新社



新銳作家叢書——小川国夫集 ©1971

初版発行——昭和四六年二月二五日 再版発行——昭和四七年一月一四日

定価——六八〇円 装本——杉浦康平＋中垣信夫＋海保透 Carpenter Center for the Visual Arts : Cambridge M.A.

発行者——中島隆之 発行所——株式会社河出書房新社 東京都千代田区神田小川町三六 電話東京三三二二(代) 振替東京二〇〇三

本文印刷——晁印刷株式会社 製本——中西製本印刷株式会社

乱丁・落丁本はおとりかえいたします 0393-534103-0961

役者たち……………7
物と心……………11
海と鰻……………13
速い馬の流れ……………15

相良油田……………19
東海のほとり……………29
動員時代……………43

高砂族……………48
三月……………51
お麦……………54

爽かな辻……………59
エリコへ下る道……………62
修道士の墓地……………66
アポロンの島……………80

地中海の漁港……………101
鞭打苦行者……………127
アフリカン・ナイト……………130

旅の痕跡……………147
ゲラサ人の岸……………149

影の部分……………159
心臓……………178
河口の南……………188

枯木……………213
アポロナスにて……………216
海からの光……………220

主観的照明……………226

小川国夫の目古井由吉……………238

年譜……………248

新銳作家叢書——小川国夫集

役者たち 物と心

海と鰻 速い馬の流れ

相良油田 東海のはとり

動員時代 高砂族

三月 お麦

役者たち

六一は祖母について行つて、しょっちゅう芝居を見た。彼の祖母というのは、家族からのけものにされていて、町の芝居小屋で、モギリやお茶汲みや下足番をやっていた。他にもそういうことをしている人が二、三人いて、持ち場を廻していた。だから六一が一人で小屋へ行くと、祖母が木戸にいないこともあったが、だれがいても彼は通してもらえた。

昼間、六一は役者の寝泊りしている所へもよく行った。それは小屋に附属した二間続きの粗末な家で、役者たちは枕を並べて寝なければならなかった。桑畑がそのまま庭になっていた。そこで彼らがおそい朝食を食べている所を、浩も六一に連れて行つてもらつて、見たことがあった。彼らの飯はうまさうさだった。輝くように白くて、田舎では贅沢な感じさえた。しかし、お碗の数が足りなかったの

7

に、桑畑の向うをカーヴして走っている軽便のデッキから、畔道へ身軽に跳び下りた男があった。浩はそれを見て、いい恰好だと感心し、役者だからそんなことが出来る、と思った。その人は国鉄の駅の近辺へ行つて、お碗としらす干しを買つて来たのだった。

彼らの生活はくだけた感じだった。家族とも、友達同士とも違つていた。浩には彼らの辛さは解らなかったから、そんな自由な感じだけが羨ましかった。

六一は、ゆうべ血を吐いた浪人はこの人とか、鳥追いのおせんはあの人で、本当は男だとかいって、当てて見せた。浩は解つたような解らないような氣持だった。はつきり解つたのは、乃木大将という言葉ぐらいなものだった。いずれにしても、浩は無性に芝居が見たい氣がした。それに役者たちは感じがよかった。愛想よく、遠慮っぽくて、二人をからかうようなことはなかった。浩は、この人たち

はもつと威張つて普通なのに、謙遜なのだ、と思った。

或る晩、浩は六一と一緒に芝居を見て、翌朝また二人で彼らの宿舎へ行った。すると、劇中では極悪な婆さんだった人が、座長の細君で、優しく二人に煎餅を塵紙に包んでくれた。娘役で舞台では花形だった人が、束髪にして、地味な染め紬を着て、衣裳の整理をかいがいしくやっていた。彼女は小声で歌をうたっていた。それは前夜の幕あいに、レコードで流していた歌だった。だから彼女が朝ひっそりとうたっているのが、体の中に残っている余韻の感じで、いかにも芝居の翌朝らしかった。浩には歌詞は全部おぼえられなかったが、観音参りに帯とけて、とけて結んだ恋心、という文句だけはおぼえた。そこはいい調子だったし、彼女が自分の身の上を歌っているようにも、浩には聞こえたからだった。

浩が立っていたのは、羊歯^{しだ}川の川原のようだった。堤の上には、大ようにも緻密にも見える雲の渚が、海の方まで続いていた。足もとには、あまり勢のよくない草が一面に生えていて、所々に猫柳が見えた。大きな茶色のバッタがキリキリいいながら、あっちこちで舞っていた。彼は捉えることが出来るとも思わないで、バッタを追い掛けた。バッタが間近に止っていることもあったが、近づこうと思うと、浩の気持の動きに符牒を合わせたように、光が透け

役者たち

る内翹を見せて舞い立った。彼はバッタをほしくはなかったし、散漫な自分の気持を淋しく感じていた。そのうちに、若い女の人に行き合った。その人の着物の黒地には、火のように赤い矢の模様がついていた。

——たくさんいても、一匹もおさえられないのね、と彼女は笑いながら声をかけた。そして浩が黙っていると、

——ねえ、ボク……、とからかうようにいった。彼女の背後にはバッタが一面に舞っていて、木の車が軋むような音が、ひっきりなしにしていた。彼女は着物はいいものを着ていたが、戸外を長く歩いたせいか、髪は乾いて大分はつれていたし、肌にも潤いがなかった。芝居で見た女の人だ、と浩は気づいた。そして、宿舎にいた時の恰好でいれぱいいのに、と思った。しかも芝居の中に、彼女がこうして立っている場面があったように、浩には思えた。

——これは芝居じゃないら……、と彼は、唐突とも思わないで、たずねた。彼女も、別に唐突とは思わなかったようだった。

——お芝居って……。ボク、お芝居やるの……、とじらす感じで聞き返した。

——僕はやらんけん、お姉さんは芝居の人だら……。

——そうだよ。

——僕は今芝居やってるんじゃないら……。

——お芝居やってるのかって……。

……………。

浩は彼女の表情を見守っていたが、失望した。自分は考
えもなしに、まづく質問してしまったと思った。

—あなたが若い衆で……………。

……………。

—バッタが鳴くお芝居なんかあるかしら。

……………。

—わたしたち、お芝居やってるんじゃないわ。

彼女はいった。浩は簡単にその答えを聞いてしまったの
が、惜しいような気がした。彼は後悔していたのだ。その
答えは最初から決っていたのではなくて、いわば、自分が
サイコロを下手に振ってしまったようなことで、やり直せ
ば別の数が出るような気がした。浩は半ばバッタの音に耳
を澄ましながら、考え込んでいた。

—お芝居じゃないわよ。一人もお客さんがいないじゃ
ない。

—芝居のように思えるけん。

—ふふふ、面白いことをいう子ね。ボク、お芝居の若
い衆みたいに、わたしにしたいの……………。

……………。

—お芝居は夜よ。……………見に来てくれる……………。

—家の人が悪いっていうもん。

—でも、小屋へ来たことがあるんでしょ。

……………。

—ないしょで来ればいい。

……………。

—面白いわよ。

……………。

—どうしたの、ボク……………、と彼女は体をかがめ、浩の
顔を覗き込んで笑った。

……………。

—キャラメル、上げようか。

彼女は帯にキャラメルの箱を挟んでいたのだった。細い
指でそれを抜き出し、封を開けて、ちよつと振った。キャ
ラメルの包みがゴソツと音を立てて滑り出て来て、草の中
へ落ちてしまった。彼女はしゃがんでそれを拾った。二個
だった。冷たい手で一個を浩に渡し、もう一個の紙を剝い
で、前歯でくわえるようにして、口へ入れた。浩もしゃぶ
った。すると口の端からよだれが出て来た。浩は急に恥ず
かしい気持になって、よだれを手の甲でぬぐって、彼女の
顔を盗み見た。彼女の唇はめくれていたような形だった。
舌でキャラメルを動かしているのが判った。きれいに血が
透けた口の中が見える気がした。

彼女の表情を見て、彼は思い出したことがあった。それ
は舞台や打ち出しの挨拶の時、彼女が男の前へ出ると、顔
と仕草でひるんだ様子をするこゝろだった。浩にはそのこと

が、いじめてほしい、といっているように思えた。

彼は口の中に、キャラメルの甘い汁が味わわれずに滞っているのに気づき、それを味わった。彼はわずかに慰められたような気がしたが、その根拠はないように思った。

——本当に、お芝居へいらっしやいな、と彼女は思った。

浩は観音参りの歌が、芝居小屋で聞こえていたことを思い出していた。そして、木戸の賑かさの中で見た建具屋の某や、蹄鉄屋の某の、けじめのない感じに緩んだ顔を思い浮かべた。

——行かん。僕は人寄りはやだ、と彼は呟いた。

——来てくれないのね。

——……。

——来てよ。木戸でゆかりを知ってるっていえばいいの。ただ見出来るわよ。

役者たち

——……。

——時間知ってる……。

——うん、六時半だら。

——そうよ。……はい、これ上げるわ。

そういつて、彼女はキャラメルの箱を浩に渡して、立ち去った。

彼女の行く先々にバッタが舞い上った。浩には、彼女が華奢な肩をゆすりながら、洲から流れの白い跡へ下り、堤を越えてしまうまで見えていた。その着物の裾のあたりが、込み入った眩しい感じに、いつまでも動いていた。

彼女の名前を浩が知っていたのは、六一と一緒に芝居へ行った時、彼女が舞台へ現われると、ゆかりちゃん、と声が掛ったからだ。ゆかりちゃん、もう病気は癒ったの……、と声を掛けた観客もあった。

物と心

兄の宗一と一緒に、浩は駅の貨車積みのホームへ行き、鉄のスクラップの山をあさって、一本ずつ古い小刀を拾った。二本とも錆び切っていたので、家へ戻って、二人は砥石を並べてわれを忘れてといた。時々刃に水を掛けて指で拭い、とげた具合を見るのが楽しみだった。浩の小刀はよく光り、刃先へ向って傾斜している面には、唇が映った。宗一の小刀は、その面の縁だけが環状に光っていて、中央には錆びたままの、窪んだ部分を残していた。

浩は、自分は丸刃にしてしまったが、兄さんは平にといだ、と思った。浩は自分が時間を浪費して、しかも、とりかえしがつかないことをしてしまったように思い、周到だった兄を羨んだ。浩は心の動揺を隠そうとして、黙ってまた砥石に向った。横にいる宗一が意識されてならなかった。彼が横にいただけで浩は牽制されてしまい、自然と負けて行くように思えた。しかし浩は並んどいた。宗一が

10—11

どんな風にとぐか気になったからだ。宗一はやっていることに耽っていた。浩は自分も耽っているように見せかけた。浩には時間が長く感じられた。自分がひとをこんな思いにさせることがあるのだろうか、と彼は思った。

浩は自分の小刀で掌を切って、宗一に見せるようにした。宗一はそれに気づき、眼を上げて浩を見た。浩は自分から宗一の視線の前へ出て行った気がした。宗一を騙した自信はなかった。宗一はといていた小刀を浩に差し出して、

——これをやらあ、といった。そして今まで浩がといていた小刀を、とぎ始めた。

——怪我はどうしか、と浩は聞いた。彼はもう嘘の後始末の仕方を、宗一に求めている気持になっていた。

——怪我か、ポンプで洗って、手拭で圧えていよ、と宗一はいった。

——…………。

——お前んのも切れるようにしてやるんで、痛くても我慢して待っていろ。

浩はポンプを片手で押して、傷に水を掛けた。血は次から次へと出て来て、水に混ってコンクリートの枠の中へ落ち、彼に魚屋の流し場を思わせた。彼はその流れ具合を見

物と心

て、これが僕の気持だ、どうしたら兄さんのように緊った気持になれるだろう、と思った。宗一は巧みに力を籠めていっていた。浩はその砥石が、規則正しく前後に揺れているのを見守っていた。全てが宗一に調子を合わせて進んでいた。

海と鰻

小学校からの帰り途だった。ツネと浩は質屋の前の川で鰻を見付けた。大きい鰻が川の真中にじっとしていた。流れはそこを除けているようだった。浩が

—— 掴まえよう、といった。ツネが

—— どうしるだや、と聞いた。

—— 川へ入って、鰻を掴まえて、道へ放らあ

—— 駄目だよ、それより兄ちゃんを呼んで来まあ、浩は—— うん、といって、ランドセルをツネに持たせると、

学校へ駆け戻った。彼は、学校を出て来る時、前庭の撒水をしていたツネの兄を見たのを思い出した。ツネと一緒にあったのは、それから後、途々だった。

浩に鰻がいることをいわれると、浜司は、

—— 俺は行かあ、といった。一緒に撒水をしていた二三人が、当番中に行つてはいけない、といった。浩はその人達に

12—13

—— 鰻がいるんだよ、といって、太さを指で作って見せた。みんな校門を出て駆けて来た。

鰻はもとの場所にいた。ツネは一人の間中鰻から目を離さなかった。

浜司は遠くの方で水に入って、鰻に近付いて行つた。掴えて路上に放り上げた。

浜司達は学校へ戻った。浩とツネは大きい罐詰の空罐に鰻を押し込んで、めくれている蓋を持って帰った。自分の家へ着くと、ツネは

—— ここへ置いてつてよ、といった。浩は

—— うん、といって、二人でしばらくバケツに移し換えた鰻を見ていた。浩が去った。浜司が帰つて来て、鰻を覗いていて、

—— フン、といった。そしてどこかへ遊びに行った。母親が工場から帰つて来た。父親が帰つて来た。玄関に

置いてあつた鰻を見て、

— これか、といった。そして

— 柚木さんの浩さんが、学校帰りに、浜司と一緒に掴まえたんだって、と母親にいった。ツネは

— 兄ちゃんが掴まえたのよ、といった。父親は母親と話していた。

— 焼いて、あした俺が柚木さんへ持つてくで…… ツ

ネは

— とつちゃん、浜ちゃんが、水撒きをやめて掴まえたもんで、掴まったのよ

— そうか、と父親はいった。

— 浜ちゃんが帰つて来れば解るよ、ツネがいった。

— ツネ、タボコを買つて来い、ほれ、ゼニ、といつて、父親は娘に八錢やった。ツネは玄関へ行つて、鰻を覗いた。鰻がバケツの底に丸くなると、尾と頭が重つていた。頭を尾鰭の蔭へ入れて、息をしているようだった。ツネはそれをしばらく見ていて、

— なんで柚木さんへやるだやあ…… といった。父親は

— 子供は黙つてろ…… といった。母親は

— ええに、やりやせんに…… といった。父親は

海と鰻

— なに、やるだよ、といった。ツネは、これは駄目だと思つた。鰻は柚木さんへ持つて行かれるのだ。

ツネは煙草屋からの帰り途で浩に逢つた。

— ヒロちゃん、とつちゃんが鰻をヒロちゃんちへ持つて行くつて……、焼いて

— おら要らないんだけど……

— でもヒロちゃんのお父さんが好きずら……

— うん好きだよ

— ヒロちゃんは、浜ちゃんと一緒に鰻を掴まえたつて、家の衆にいったの……

— うん、浩は声を小さくして答えた。

— それはそうだけどさ…… とツネがいった。浩は何かいなければならぬ、と思つた。

— あした、土曜ずら、自転車へ乗せて、焼津へつれてつてやらあ

— 焼津へ……海まで行くの……

— うん、川尻まで行くかも知れん、大井川が海へ出るところだ

— 何時間位自転車へ乗つてゐるの……

— うん、そりゃ、五時間位だ